

遠雷

えんらい

鏑谷晴矢

かぶらやこうし

「しごと」をしてから、ちょうど五つ数えた時、  
「掏摸だ！」

背後で男が叫ぶのを聞いて、お銀は満足気な笑顔を浮かべた。  
路地に入り、何度か角を曲がってから立ち止まって、財布の中身をあらためる。  
身なりから推しはかって、手にした重みから想像した通り、小銭ばかりで二朱入っていた。

「はん」

すつきりと形の整った鼻で笑うと、お銀は路地を進んだ。

さらに幾度か曲がって元の通りへと戻ると、まだ騒いでいる男の足下へ財布を投げる。  
もちろん誰にもみられていないことを確かめてからだ。

「おい、その足もとに転がってるのはなんだ？」

「あ、こりや、俺の財布だ」

「中身を確かめてみな」

「うーんと、確かに二朱」

「二朱だあ？それっぽっちであれだけの騒ぎをしやがったのかあ。人騒がせもいい加減にしろい」  
「すまねえ」

男が頭をかきながら謝るのを横目で見つつ、お銀は通りを歩み去った。

その歩き方は、見る者が見れば尋常でないことが分かったはずだ。

しやりしやりと、急いでいる風でもないのに、その実、かなりの速さで歩き、ひどい混雑の通りで、  
誰にもぶつからずに躰を運んでいく。

歩きながら、お銀は、ほくそ笑んだ。

掏摸にもピンからキリまである。

お銀ほどの腕前になると、財布を掏摸とつた時に残す感触で、どれくらい経ってから相手に気づかせるかまで加減できるのだ。

——今日は思ったとおり、五つ数えて気がついた。あたしの腕もなかなかのものさ——

橋本町に入ると、お銀の歩き方が変わった。

肩を、腕を、躰を弾ませて歩く、十七という年に似合ったおきゃんなものになったのだ。

躰の動きにあわせて、髪にさした簪かんざしが美しくゆれる。

やがて、お銀は、表通りに面した、さして大きくはないが小ぎれいな小間物屋の暖簾をくぐった。

「ただいま」

「お帰りなさいまし。お嬢さん」

店の者が一斉にお銀を出迎える。

いや、店での彼女は、お銀ではない。それは掏摸としての二つ名だ。

お銀の表の名は「ことえ」という。そして、それは本名でもあった。

番頭が寄ってきて、留守の間の商いを伝えた。そのひとつひとつに頷うなずいて、お銀は指図する。

「お嬢さん」と呼ばれてはいるものの、親代わりのおとしが、この春に死んでから、お銀はこの店の女あるじなのだ。

部屋に戻ると、火鉢の中に、赤い簪が刺さっていた。お銀の表情がひきしまる。

相談事があるため、急いで集まりを開いて欲しいと配下の者がいつてきているのだ。

「何があったのだろう」  
訝しげにお銀はつぶやいた。

井崎琴江は、東国の上級藩士の次女として生まれた。

七つの年に、藩の利権がらみで父が上司を斬り、家族で脱藩した。

江戸に来て四年余りで、藩主が寄こした追っ手の手にかかって父が殺され、一年後、母は病死した。その後、長屋の差配の手によって、姉のお光とは別々に養い親に引き取られた。

以来、姉のお光の行方は知れない。

琴江を引き取ったのが、小間物問屋の女主人おとしだった。

「あたしや、あなたなんか欲しくなかったのさ」

挨拶がすんで、座敷に二人きりになったとたん、おとしは冷えた声でそういった。

「あなたの指が気に入って、それが欲しかったんだ。さあ、これから、あたしのいうことはなんでも聞くんだよ」

やさしいおばさんだと思っていたおとしの変わりように竦み上がった琴枝は、ただ何度も頷くだけだった。

それから数年間、ほとんど店の外へ出されずに、琴枝の奇妙な修行が始まった。

まず、様々な布を指で触らされ、その感触で生地の種類から使われた年数までも当てさせられた。

次に、何百枚と積み重ねられた紙を一枚いちまい指で弾かされた。はじめのうちはうまくいかず、よく竹のへらで折檻された。それは大してこたえなかったが、同時に食事を抜かれるのは辛かった。

二年が経つと、十数えるあいだに、何百枚と積まれたすべての紙を弾くことができるようになり、三年目には、一瞬で部屋全体に紙吹雪を舞わすことができるようになった。

その頃までには、琴江も、これが掬摸の修行であり、おとしが女掬摸の頭領で、信頼できる跡取りを育てるために自分を引き取って修行をさせていることに気づいていた。

店の者には、娘は躰が弱く、住まいの奥で寝込んでいるのだといってあるようだった。

十五になった琴江は「ことえ」として店のものに紹介された。

同時に、おとしに連れられて様々な場所に赴き、実際に財布をすらされ、裏世界についても教えられた。

十六になると、おとしは、ことえに若い頃の自分の二つ名「稲妻お銀」をあたえ、配下の女掬摸へ顔見せをさせた。

掬摸の世界は実力の世界。始めはことえを快く思わなかった者も、その腕前を知ると、素直に従うようになった。

「お頭。おそのが死にました。大川に飛び込んだんです」

昼過ぎ、町外れの朽ちたお堂で顔を合わせるなり、配下の一人がいった。皆、青い顔をしている。

「なぜ」

「あたしが話すよ」

一番、年かさのお竜が身を乗り出した。

「おかしら、おそのは、お里の仲間になるように脅されていたんです」

「お里……つばめがえしのお里かい」

お竜は領いた。

お銀が裏世界に出るまで、天才と呼ばれた女掏摸だ。

「そして、ご存じのように、おそのは、あたしたちの仕事の書き付けをやってくれていた」

「まさか、あんた」

「そう。どこを探しても、おそのが持っていたはずの書き付けがみつからないんですよ」

お銀は、なぜ皆が青い顔をしているか理解した。

身分のある者からすった、あるいは大金をすったなどの、掏摸仲間の大仕事を記した書き付けを、対立する女掏摸に取られたのだ。

おそのは、その責めを感じて大川に入水したのだろう。

だが、これでは首根っこを押さえられたも同然だ。

「わかった。あたしが何とかしてみよう。皆は心配せずに待て」

そういつて手下を帰したものの、どうすれば良いか、お銀は途方にくれていた。

掏摸の習性として、お里も、手に入れた宝物は必ず自分の懐に持っているはずだった。

掏摸にとって、自分の手元ほど安全な場所はないのだ。書き付けはお里の懐にある。

そこから、ただ、すって取り返せば良いのだ。

だが、それはできない相談だった。

掏摸が、どうしても手を出せない相手がふたつある。

一流の武芸者と同業者だ。

どれほどの天才でも、これには手が出ない。

関ヶ原の後、江戸に御政道が移って四十年。

一流の武芸者こそ減ったものの、掏摸の数は、江戸の繁盛ぶりにあわせて増え続けているが、決して

掏摸は同業者を狙わない。否、狙えないのだ。手口を知りすぎ、相手の感覚が鋭敏すぎる。

もう何十年前前に、真の天才として伝説となった元祖「稲妻お銀」は、平然と同業の掏摸からすり、

一流の武芸者の懐を狙ったといわれているが、おそらくそれは尾ひれのついた噂だとお銀は考えていた。

おとせは、その初代お銀から稲妻の名を引き継いだのだ。お銀はその三代目ということになる。

気がつくとお銀は、馴染みの居酒屋「五七妻」の暖簾の前に立っていた。

夕暮れ前で、店が閉まっているのは分かっていたが、知らぬまに足が向いてしまったのだ。

このところ、お銀は、よくこの店に来る。

店のある橋本町から、ずっと離れた坂井町にあるため、人目を気にしなくても良いのと、若い娘の身

でやってきても、肩肘張らずに過ごせる店の雰囲気が好きだからだ。

五・七・妻でイナヅマと読ませる店の名前も良い。

だがなにより、店の女あるじ、おみねの人柄が、お銀は好きだった。店の客のほとんども、おみねに惹かれてやってくる。

おみねはもう若くない。年はおそらくは六十代の終わり頃だろう。しかし、若い頃、輝くばかりに美しかったであろうことは、今も艶っぽく輝く、切れ長の目から容易にわかる。

そして、その落ち着いた話ぶり、毅然と背筋をまっすぐに伸ばした姿勢もお銀は好きだった。

「どうしたんだい」

柔らかな声に振り返ると、おみねが立っていた。

人気のない店に座ると、おみねはだまって大根の煮物を皿に盛ってくれた。いつも、まだ娘のお銀に酒は出さず、来るたびに美味しい煮物を選んで出してくれるのだ。おみねは何も聞かない。ただ、向かいに座ってお銀の目を見つめ、微笑むだけだ。しかし、そうされるだけで、いつの間にか、お銀は胸のうちをおみねに話しはじめていた。もちろん、自分が女掏摸の頭領であるとはいわない。

小間物屋の主として、番頭が大事な書き付けをすられたという形に話を置きかえての話にする。前に話してあるため、おみねは、お銀が小間物屋の主であることを知っていた。

「お上には知られてもかまわないけれど、同業者に知られたら困る書き付けなんです」

「そうかい——」

それが癖なのか、いつも手にしている、大きめの根付けを弄もてあそびながら、おみねはいった。

「それは大変だねえ。まったく、掏摸つてのはやっかいな生き物だよ。この店にも何人かくるけどね」自分のことをいわれているようで、知らずにお銀は身をかたくした。普段は掏摸の頭領として、誰にも負けない意気地いきぢがあるつもりのお銀だが、おみねの前では、年齢どおりの小娘に戻ってしまう。

正直に、ではないが、おみねに話して気持ち軽くなったお銀は、混みだすまえに店を出た。

——自分も天才といわれた掏摸だ。だめかも知れないが、お里から書き付けをすり取ってやろう——気持ちをかためたお銀は、夜になるのを待って、お里が表向きの顔として主をしている小料理屋に向かった。

からり、と戸を開けると、向こうから、お里が飛び出してくるのが同時だった。

「よくもやってくれたね」

お銀を認めるとお里は叫んだ。悪鬼あくまのような顔になっている。

「あんたをなめてたよ。この借りは必ずかえすからね。覚えておきな」叩きつけるようにいい残し、よろめきながらお里は走り去っていく。

狐につままれたような気分で見送ったお銀が店に帰ると、番頭が待っていた。

「お年を召したおきれいな方が、これをお嬢さんへお渡しください、と」

気持ち騒ぎ、部屋に急ぐと、お銀は手渡された封書を開いた。

中には、あの書き付けが入っていた。

その一瞬、お銀はすべてを理解していた。

居酒屋五七妻……この店にもよく掏摸が来る……そして、あの物腰ものこし。

おみねは、あの伝説の女掏摸「初代稲妻お銀」なのだ。

さらに、今まで気づいていなかったことも今なら分かる。あの根付けだ。

前に一度見せてもらった時、無骨な字で「たけぞう」と彫ってあった。

あれは、おそらく——宮本武蔵からの戦利品だ。

四十年以上前、若く美しかったイナヅマは、一流の武芸者にさえ打ち勝っていたのだ。

書き付けを握りしめ、呆然として、いつまでもお銀は部屋に立ちつくしていた。